
とある夏の出来事

レッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある夏の出来事

【Nコード】

N0437J

【作者名】

レッド

【あらすじ】

ある日の夜。夕飯の支度をしようと冷蔵庫を開けるが、食材が何も無い!?

仕方なく、寝て空腹を紛らわそうとする上条さんだが、大食いシスター・インデックスには我慢できるわけもなく…

「…ついにこの時が来てしまった」

「どうしたの？当麻、真剣な顔をして」

「……冷蔵庫の食料が底をついた」

「ふーん…じゃあ、買い物に行かないとね。それとも、外食でもいいよ」

「いや…外食どころか、買い出しにも行く金がない」

「それは一大事だよ当麻！！早く何とかしないと、私とスフィックスが大変な事に…」

私、上条当麻は学園都市に住む普通の高校生。

学園都市って事は、親元を離れて生活しているわけで、私生活は丸々自分で何とかせねばならない。

一応、お金の収入はあるのだが、この学園都市、実は超能力者を育てる場所で、収入は能力が優れている者程高額が入る仕組みだ。つまり、俺は能力が優れていないため、ろくな収入がない。

「お得意のモヤシ料理とか出来ないの？野菜炒めとかでも構わないんだよ」

「だから、野菜も無いんだよ」

ちなみに、先ほどからメシばかり気にしているのは、インデックスと言って、いつの間にか俺の部屋に居候していた奴だ。

いつの間にか、というのは、俺がある事情で、記憶を失っているため、それ以前からの知り合いに関しては、全くもって知らない。

それと、スフィックスというのは、インデックスが勝手に拾って来た猫である。

今はそんな事より：

「寝よう：寝て空腹を紛らわそう。そういう事で、寝るぞインデックス」

「えー！？ まだ夜の7時過ぎだよ！ 眠れないし、空腹でそれどころじゃないんだよ」

「んじゃあ、水を飲め、人間一週間はそれでやってける」

「私にはそんなの無理だよ」

「んな事言ったって、どうにもなんねーよ」

「うう：あれ？ 当麻、ここにあるパンは何」

インデックスは冷蔵庫の扉のところにある、以前コンビニで買った焼きそばパンを指差した。

「ああ：賞味期限がとくに過ぎてたから、捨てようかと思って：っておい！ 何食べようとしてんですかインデックス」

「食べ物を捨てる何て罰当たりなんだよ。これは私が責任をもって処分するんだよ：うん、まだ大丈夫みたい」

「え：ホントに大丈夫？ 賞味期限、軽く三カ月くらい前何ですけど」

美味しそうに食べるインデックスを見てると、こっちまで食べたくなってしまう。

「賞味期限なんて目安なんだよ。それが過ぎたからと言って、ダメなわけじゃないんだから、はむ」

「あ、あのおインデックスさん。この私めにも分けていただけないでしょうか」

「しょうがないなあ、ほら半分こだよ」

「有難うございますインデックスさん！ それでは早速一口：ぐあ！？ 何だこの味は：夏か、夏だからなのかっ」

「どうしたの当麻！？ 苦しいの」

変な味が口の中に充満した途端、腹に激痛が走る。やっぱり、夏に賞味期限が切れたモノは食べるべきではなか…った。

「当麻ー大丈夫？」

「あ、あのおインデックスさん。あまり、トイレの前に立たないでくると嬉しいのですが」

「トイレに籠ってからだいぶ経つから、心配してるんだよ」

「も、もう少し時間がかかりそうなんだ。だから、テレビでも見ててくれませんかね」

「うん。でも、何で腹痛になったんだろう？ もしかして、私に隠れて何か食べたんでしょ！ それでこうなったんだ」

「お前と同じものしか食ってねえよ！！ つうか、なんでお前は平気なんだよ、あんだけ腐ってれば誰だってこうなるだろ！」

「アレで腹痛になるなんて、当麻のお腹はやわなんだね」

くそ…危うく病院送り寸前だった。少量で気づいてよかった。というより、匂いで気づくべきだった。

おかげで、空腹とか言ってる場合ではなくなったが。

今はそれよりもツライ。

「お前の頑丈な腹と違って、俺のお腹はデリケートなんです！」

「む。何か失礼な言葉が聞こえたんだけど、気のせいかな」

「気のせいだから、早くそこから離れてくれませんかね。じゃないと、いつまでたってもできないんですけど」

「？なにが」

「トイレですることと言えばわかるだろ」

／／／／／

「どーした？……もう行ったかな」

「当麻のバカ！！ 女の子のに向かって、どーしてそーデリカシーのないことが言えるんだよっ」

「はいはい、それはどーもすいませんでした。くそ、やっぱり捨てるべきだった…騙されて食べた俺も悪いが…」

「なに、ぶつぶつ言ってるのさ。……あーっ!？」

「なに、どうした!? インデックス」

「スフィックスが糞してる」

「なんですと!?! あーくそ、こっちも同じ状況だ」

「いちいちそんな報告はいらないんだよ。それよりどーしよ当麻」

「新聞紙とか何かないのか」

「それよりも、スフィックスも様子がおかしいんだよ……病気かな」

「……まさかとは思うが、さっきのパン食べさせたりはしてないよな？」

「え? したけど。当麻がいらないそうだったから」

「ばか! それは食あたりだ! 今すぐ病院に……駄目だ、腹痛で動けねえ」

一口でこのありさまだ。俺の残りを食べたとなると、そうとうのダメージだろう。

つうか、仮に病院に連れて行ったとして、治療費はどうするんだ? それよりも、治療費があるならこんなことにはなっていない。

……こうなりや

「インデックス、隣の部屋に行って土御門に事情を説明して助けてもらおう」

「え……うん、わかったよ」

それから少しして…

「それじゃあ当麻、スフィックスを病院に連れてくね」

「おー…気をつけてな…」

これでようやく落ち着ける。土御門には仮ができたなあ。

まあ、緊急だったし…

今は感謝するとしますか。

「ふう……」

何とか収まった。

この夏は、何かと有りすぎて、自分の事でピンチになるのは久しぶりだ。

便座から立ち上がり、トイレの扉を開けリビングに出る。

「……何か臭うな、……ってか臭っ!?　　そういやアイツ、糞の後始末しないで行きやがったんだ」

部屋中、糞まみれ状態。

リビング丸々、スフィックスのトイレにされた気分だ。

「げっ!?　　土御門に借りたゲームにも漏らしてやがるッ!　オマケに俺の布団にまで!　インデックスのヤローあれほどベッドに乗せるなど言ってたのに……」

苦しんでた割に動きまくってるし…

最悪だ…あまりの臭さに、吐き気が…

早く何とかせねば、匂いが染み付いてしまう。

ぐによ

「あー…出たよ、来たよ…この感触、もはやこうなるのは、お約束？こんなオチはホント最悪だよ」

足をどけて、現状確認。

うん。確かに踏んでるね、おもいつきり踏んでますね。
猫の糞か…

皆さんもお分かりですね。

じゃあいけますか。

せーの

「不幸ーだあああああ！…！！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0437j/>

とある夏の出来事

2011年10月3日23時20分発行